

五等分の花嫁 三玖 $\sqrt{\quad}$

フィヨルド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転校初日。三玖は食堂で風太郎と出会った。

積極的に他人との関係を築いてこなかった二人がこの日偶然出会ったことで、互いに成長し、そして関係を深めていく。

……のだが、そう簡単に上手くはいかない。

三玖は風太郎にどう向き合うのか。

顔を見たいのに。話したいのに。触れて欲しいのに。

思わず顔を背けてしまうのは……なんでだろう。

目次

# 1	三玖は焼肉定食を知る。	1
# 2	二乃と五月は隠密行動が下手過ぎる。	14
# 3	二乃、フラグを立てる。	28
# 4	三玖はお布団の気持ちよさを知る。	36
# 5	三玖のパソコンには秘密のファイルがある。	47
# 6	二乃だけが生き残った。	57
# 7	風太郎はオーストラリアドルを知っている。	66

1 三玖は焼肉定食を知る。

スカートの裾を伸ばし、靴下を穿いて、鏡に自分の顔を映す。

「そろそろ行きますよー」

トントン、と数回のノックの後に聞こえてきたのは三玖の妹、五月の声だ。妹といっても、産まれてきたのは三玖の数時間後。五人の中で、たまたま最後に産まれたに過ぎない。

五月の声を聞いて、ベッドに放っておいたバッグを肩にかけ自室を出る……が、ドアノブに手をかけたところで、大切なものを忘れていることに気付く。

小走りで戻り、机の上に置いてあるヘッドフォンを首にかけた。

今日から新しい生活が始まるからだろうか。通う学校が変わる。ただそれだけの事にも関わらず、どうやら少しは楽しみであったらしい。浮足立って忘れ物をしてしまうくらいには。

けれど、期待はしない。

前の学校では他人と積極的に関わらなかつた。

するのは最低限の会話と事務連絡のみ。おかげで友達なんてものではできなかつたが、

別に構わなかった。

だから、今日から通う学校でも同じ。

外の世界と、自分の世界とを、ヘッドフォンを隔てて遮断する。

親しい友人ができることなんて期待しない。

でも五つ子みななとの学校生活は楽しみだ。二乃はイケメン探し、五月は……今日から早速

買い食いだろうか。

私は、みんなみたいにはなれないけど。

三玖はそんなことを思い、ふっと口元を緩めながらドアを開いた。



午前中は新しい学校を見てまわった。

四階建ての校舎を、理科室、美術室、家庭科室——とぐるりと一周。

最初は五つ子全員一緒だったのだが、自分の担任となる先生について行っていると、

いつの間にかみんなとは別々になってしまったようだ。

担任の教師はクラスと自己紹介の内容を考えておいて欲しい旨を三玖に伝えると、一旦昼食をとることとなり、食堂まで案内した後去って行った。

昼休みということもあり、食堂はとても賑やか。

食べている物は、ラーメン、カレー、スパゲッティと様々で、三玖の頭には何を食べようか迷う五月がすぐに浮かぶ。

その五月たちはまだここには来ていないようで、仕方なく一人でサンドウィッチでも食べようかと思っていた時、注文口の方から奇妙な単語が聞こえた。

「焼肉定食、焼肉抜きで」

焼肉定食なのに焼肉抜き。

明らかかな矛盾を孕むその言葉に興味を持ち、発せられた方向を見ると、そこには黒髪の真面目そうな顔をした男子生徒の姿があった。

向かう先には、常設のウォーターサーバーが。

焼肉定食焼肉抜き……？ この学校で、流行ってるのかな……？

もちろんそんなわけないのだが、三玖はウォーターサーバーを見て喉の渇きを思い出す。午前中校舎の中を歩き回ったので当然かもしれない。

それと同時に、意識しないようにしていた脚の疲れもやってきた。

空いている席は周りにないので、重い脚を奮い立たせ、ウォーターサーバーへと向か

う。

三玖が手を伸ばせば届くような場所まで来て、黒髪の少年がウォーターサーバーの水を飲もうとしたそのとき、事は起きた。

「あつ……い！」

三玖は思わず声を漏らした。

走って通り過ぎた二人の男子生徒が黒髪の少年にぶつかったのだ。

男子生徒は申し訳程度に謝りながら、三玖の目の前を通り過ぎて行ってしまう。

そこからは時間にして一秒に満たないごく僅かな時間だったが、三玖には何故かその場所だけがスローモーションになったようにはつきりと見えた。

去っていく少年二人。

口もとに近づけたコップの中から宙に飛び出す水。

それは驚いた顔をした黒髪の少年の顔面に向かっていき……。

頭から水を被った。

……。

一瞬何とも言えない空気が漂うが、彼は何事も無かったかのようにウォーターサーバーを後にしようとして……ぼかんと口を開けている三玖と目が合った。

目の前で起きたことに固まっていた三玖だが、当事者である黒髪の少年と目が合った

事で、慌ててスカートのポケットからハンカチを取り出し差し出す。

「つ、使いますか……?」



「わざわざ悪いな」

「ううん、別に……」

三玖がハンカチを差し出した流れで相席した二人だが、三玖と同じく、黒髪の少年も他人と話すことは慣れていないようで、そのまま暫く無言の時間が過ぎた。

「とりあえず、昼食うか? 昼休み終わっちゃうしな」

「そ、そうだね」

無言に耐えかねたのか、おもむろに少年が切り出す。

スマホの時計を見ると、時刻は十二時五十分。五時限目が始まるまで後三十分だ。昼食を取るには十分すぎる時間だが、自己紹介を考えなければならぬ。転校生にとつてはちやうどいい時間かもしれない。

まあ、私は考える必要はないけど。

黒板の前で、新しいクラスメイトの正面で名前を宣言して終わり。

三玖自身簡素で味気ないと思うが、積極的にクラスメイトとの交流を深めることはないのも思っている。

サンドイッチの包装をはがし、一つ口に運ぶ。

なんとなく視線をテーブルに落としていたので目に入ったのだが、少年の目の前にあるのは、ご飯、たくあん、味噌汁という簡素な食事だった。

『焼肉定食、焼肉抜きで』

不意に思い出した先程聞いた奇妙な単語。目の前の少年が言ったなら、どうやらこれが焼肉定食焼肉抜きらしい。

視線をそれに固定しながら、サンドイッチを食べていると、背後からヒソヒソとした声が聞こえてきた。

「上杉君、女子と飯食ってるぜ……」

「や、やべえ……」

こんな喧騒の中でも、他人を嘲る声はよく聞こえる。

一人でいるとよくあることだ。

周りのみんなが笑ってる声が、ひそひそと噂をする声が。まるで自分に向けられてい

るかのように聞こえてしまう。

三玖はそんな声が大嫌いだった。

「チツ……」

黒髪の少年——上杉風太郎は苛立ちを隠そうともせず舌打ちをし、三玖を正面から見据える。

「ハンカチのことは感謝してる。……けどな」

「……?」

「俺とは一緒にいない方がいい。君、転校生なんだろう？ これからの学校生活で変な噂を立てられたくないならな」

そう言いながら、自分のリュックから単語帳とプリントを取り出す風太郎。

「別にいいよ、慣れっこだし。……ええつと……上杉君？ は疎まれるようなこと何かしたの……?」

……。

別に、聞くつもりじゃなかった。

どうでもいいことなのに。

普段なら聞き返すことなんてしない……いや、できないのに……。

期待しないと決めたのに。

何故か三玖の口は自然と動いていた。

「いや、なにも。……俺は成績がいい方で、おまけにずっと一人でいるからな。ちよつかい出すにはちよつどいいのだつてことだろ」

一方の風太郎も、単語帳から目を離さずに答え突き放すつもりだったが、しかし『慣れっこ』という想定していなかった言葉が来て、思わず反応する。

別に近づきたかったわけではない。他人と深く関わりすぎることはしない上杉だったが、自分と同じなにかを持っているかもしれない三玖を無視することは、何故かできなかつた。

単語帳から目を離し、再び三玖を見据える。

「慣れっこつて、どういふことだ？」

上杉の疑問に、三玖は過去の自分を思いだし、無感情に、酷く冷めた目で答える。

——初対面の男の子に、一体何に期待しているんだろう。

「いつからかはあまり覚えてないけど……他人と関わるのはあまり好きじゃなくて……全部自分がいけないのに、現実から目を背けて……」

三玖はサンドイッチを運ぶ手を止め、頬を緩める。

「それだけだから、別に平気」

「そうか……」

「うん……」

二人の間に再び沈黙が流れる……が、何故か三玖は俯いたまま顔を上げない。

それを見た風太郎は、三玖の視線が自分の食べているものに注がれていることに気がついた。

「ん？　なんだ、食べたいのか？」

風太郎にとつては気の聞かせた言葉と言ったつもりだったが……直後、静かに顔を上げた三玖を見て、失敗したことを悟る。

「違う……」

三玖はむっとして否定した。

しかし、そんなことをしてもどうにもならないのは三玖自身分かつているので、口をつぐみ、再び顔を俯かせる。

——言えない。

たった一言言うだけなのに。

これまで他人を遠ざけていたことが。

過去の出来事が。三玖の口を重くする。

三玖自身、自分が何でこんなことをしているのか分からなかった。

期待なんてしてない……いや、してなかったけれど、相手に自分の気持ちを伝えるだ

けで、何かが変わる気がしたのだと思う。

少しの会話だけど、分かった。

この人はどこか私にいてると。

だから。

纏わり付く過去を、今だけは振り払って伝える。

三玖は震える唇をゆっくりと開いた。

「と……」

「……」

のちに、勇気を持って一歩踏み出したこの日のことを、私は一生誇りに思う。

意を決して、大きく息を吸って。

正面から見て、大きな声ではっきりと。

「わ、私と友達になってください……！」

食堂の喧騒がやけに大きく聞こえた。

自分でも真つ赤だと分かるほど熱を帯びた顔を、ゆつくりとあげる——と。

そこには、単語帳を睨みながら、片手にたくあんをくわえている風太郎の姿が……。

「ん？　なんか言ったか？」

いや、悪いのは私……。

心の中でそう思うが、それとは反対に羞恥とは違うなにかが、体の中で沸々と込み上げてくるのを感じる。

悪いのは私。悪いのは私……。声が小さかったから……。そもそも下向いてたし、今度は聞こえるように同じことをもう一度言えればいいだけ……。

しかし、心のなかでそう思っても、出てきた言葉は反対のものだった。

「もう、知らない」

プイツ と顔を背け、おもむろに立ち上がる三玖。

「単語帳、好きなんだね。私は先に行くから」

「お、おう……」

そのままトレイを返却口に戻し、三玖は去って行ってしまった。

「俺、なんか怒らせたか……？」

腕を組み少し考えてみたが、長い時間他人と深く関わらなかった風太郎にはわかるはずもない。

人の話しはしっかりと聞くべきだ。……特に女子のそれは。

時計を見ると、時刻は十三時十分。ちょうどいい時間だったので、教室戻ることにした。

——やっぱ、たくあん食べたかったのかな……？

#2 二乃と五月は隠密行動が下手過ぎる。

——関わり過ぎたかな……ま、いっか。

どうせもう話すこともない相手だ。少し気になりはしたが……関わらないのが互いの為だろう。

最後にウォーターサーバーの水をコップ一杯飲み、食堂の返却口に食器を置いたとき、持っていた携帯電話が鳴る。

画面を見ると妹からメールがきていたようで、

上杉らしいは

Re :

今日も一人でご飯食

べてる？

TEL下さい (・ω・) (

とのことだった。

風太郎は教室に向かう前にトイレに入り、個室の中で電話をかけた。

『お兄ちゃん！ お父さんから聞いた!？』

数コールの後、突然携帯から聞こえたのはらいはの大声。理由は分からないが、興奮していることだけは分かる。

「ど、どうしたらいい。落ち着いて話してくれ」

『あ、ごめんね。うちの借金なくなるかもしれないよ』

「は?」

突然のことに風太郎は何がなんだか分からなかった。

……借金が無くなる? 考えられるとすれば、親父が変なバイトでもしたとかか?

何のとは言わないが、海外を股にかけた運び屋とか。

『父さんがいいバイト見つけたんだ。最近引っ越してきたお金持ちのお家んだけど、娘さんの家庭教師を探してるらしいんだ』

——家庭教師……?」

『アットホームで楽しい職場! 相場の五倍のお給料が貰えるって!』

「やっぱり!」

『え? やつぱりって……お父さんに聞いてたの?』

裏の仕事
家庭教師……予想通りじゃねえか。親父、俺らの為にそんなことまで……。

「裏の仕事じゃねえか……」

『人の腎臓って、片方無くなっても大丈夫らしいよ』

「売ったのか!? 親父が!？」

——確かに臓器って何百万で売れるとかって噂で聞いたことはあるが……。

『うそうそ。その人は、成績悪くて困ってるって言ってたよ。でもお兄ちゃんならでき
るって信じてる!』

なんだよ。

嘘ならいいんだが……ん? 俺を信じる?

「ちよつと待て……俺はやるなんて一言も……」

いきなりのことに風太郎は断ろうとするが、

「これでお腹いっぱい食べられるようになるね!」

元来、お兄ちゃんというものは妹の頼みを断れないものであり、そもそもそんな嬉し
そうな声で言われて断れる人間はなかないだろう。

「らいはの声に反応したかのように、風太郎の腹がぐう、と鳴る。

「はあ……で、その娘ってどんな奴なんだ?」

「高校生の人だよ。お兄ちゃん为学校に転入するって言ってたし」

——転入？

風太郎はどこか引つ掛かりを覚えるが、気のせいだろうと無視をする。

『名前、なんて言ってたっけ……』



「中野三玖です。よろしくお願いします」

パチパチとまばらに拍手が起こる。

クラスにやって来た転校生。高校二年のこの時期では珍しいので、昼休みからクラス中がその話題で持ちきりだったようだ。

「女子だ」

「普通にかわいい……」

「あの制服って、黒薔薇女子じゃない？」

しかしその中で一人、風太郎は違うことを考えていた。

——この人知ってる！

転校生で苗字が中野ということは……。

俺、あの子の家庭教師するのか!?

いやいや、というより！

食堂で話した子じゃねえか！

あまりの偶然の出来事に、風太郎はらしくもなく冷静さを失うが、教室の拍手が静まった頃には心のなかで大きなため息をはいていた。

すなわち、

俺、嫌われてんじゃね？ ——と。

単語帳大好きなのは認めるが、中野さんは最後怒っていた気がする。……やつぱりたくあんなのか？

俺の勘違いならいいんだが……。

何故か給料五倍の家庭教師。中途半端なことをすれば、雇い主のお金持ちに消されかねないだろう。なら、関係は良好に保っておきたい。

風太郎は視線を上げ三玖の方を見ると、ちようど自分にあてがわれた席に移動すると

ころだった。

そして……ばっちり目が合ってしまった。

「……どーも」

「……」

そして……そのまま顔を背けて自分の席に座った。

すまんらいは……お兄ちゃん、始まる前に終わったみたいだ。



そのまま何事もなく授業は終わり、放課後の帰り道。

風太郎は休み時間に話しかけようと試みたのだが、クラスのほとんどの連中がお金持ち美少女転校生の周りに集まり、それどころではなかった。その中に特攻する勇氣などあるわけがない。

ただ、隙間から見えた三玖の顔は……とても疲れているようだった。

さて、どうするか。

家庭教師は明日から。

できれば今日のうちに話しておきたかったが、教室に三玖の姿はなく、風太郎自身帰路についているので明日に賭けるしかない。

やはり、人間関係は難しい。

今こそ話したいと意気込んでいる風太郎だが、しかし、何を間違えたのかすら分からなかった。

会話の中で、人間関係の中で起きた些細なミスは、消ゴムで消すように簡単には消せない。

相手の正解と自分の正解が違う時なんてざらにある。

まして自分の正解しか見てこなかった風太郎が、相手の正解などわかるはずがなかった。

はあ、とため息をつく。

しかし、その機会は唐突に訪れた。

「ため……息、ばかり……」

背後から声をかけられた。

三玖の右目にかかっていた前髪が風に煽られ、両目が露になる。

「帰ったんじゃないかったのか」

振り向くと、顔を真っ赤にした三玖が、膝に手をつけて呼吸を整えていた。

「はあ……はあ……」

「えつと……」

どうやら走って来たらしい。

こういうときはどうすればいいのか。

辺りを見渡すと、ちょうどいい公園があることに気が付く。風太郎はその中のベンチを指差した。

「少し休憩するか？」

それを聞いた三玖はコクコク、と首を縦に振った。

どうやら今回は間違えなかったみたいだ。



「み、三玖が男の人と一緒にいますよ！」

「慌てて走っていったと思えば……先を越されたわ……！」

「しー！ ばれちゃいますよ」

「にしても三玖がねえ。少し……ううん、結構意外かも」



「なんだか後ろが騒がしいんだが」

「ごめん、気にしないで」

「気にしないで言って言ってもなあ」

呼吸を整えながら、三玖はぼつの悪そうな顔をする。

風太郎と三玖が座っているのはそこまで大きくない公園の端にあるベンチだ。目の

前には滑り台やブランコなどのありきたりな遊具が設置されている。

「ちよつと聞こえないわね……もう少し近づくわよ」

「これ以上は危ない気がします……」

「何言ってるのよ。変な男だったらどうするつもり!？」

「だから声が大きいですって」

プシュ、と缶のプルタブを開ける音が聞こえた。

三玖の手には『抹茶ソーダ』とプリントされた缶が握られている。先程から無言が続いているので、意を決して風太郎が話しかけた。

「それ、美味しいのか？」

「うん。だけど、いじわるするフータローにはあげない」

「いや、要らないけどさ……やっぱ俺食堂の時何かしたか？」

「あ、えつと……それは」

知らぬうちに自ら墓穴を掘ったことを後悔する三玖。

歯切れの悪い三玖の返事に首を傾げる風太郎。

「コミュニケーション力が低い二人では、会話を繋ぐので精一杯だった。」

「あー、ならなんで俺を追ってきたんだ？」

「それは……食堂のことを謝りたくて……その、ごめんなさい……」

「ああ、成る程」

嫌われてないことが分かり、内心喜ぶ風太郎。

即日解雇の可能性がなくなったので、らしいはに謝らなくて済みそうだ。

「いや、俺もそういうのは得意じゃないからな、別に気にしてないし、お互い様だろ」

「うん、でも私を腹ぺこな女の子にしたのはダメだと思う」

「そこは否定しないのな……」

三玖は抹茶ソーダを一口飲み、ふっと微笑を浮かべる。

「ちよつと、押さないでよ……あんだ、また重くなつたんじゃない？」

「あー！ 言いましたね！ ついに言っちゃいましたね！」

「あはは。これはもうバレてるかなー」

「なあ、あいつらは友達？　なのか？」

「ううん、違うよ」

チラリと横目で後ろの草むらを見る風太郎。

三玖は、もはや隠す気がない様子に少し呆れていた。

一度首を横に振り、答える。

「私の妹と姉」

「へえ、仲いいんだな」

大方知らない男についていくのが心配で着いてきた、ということだろう。

自分にも妹がいたので、わかるぞ、その気持ち。と頷く。

俺もらいはが男と二人で歩いているのを見たら、着いて行ってしまおうな。

「で、残りは？」

「え？」

「四人くらいいいそうなんだが……なら、二人余るだろう？」

「余らないよ？」

不思議そうに首を傾げ、続く三玖の言葉に風太郎は驚愕した。

「私達、五つ子だから」

「……マジで？」

「うん」

三玖が頷いた、その時。

「ちよつと……危なっ……あ！」

どしーん、と。

三玖と風太郎が座ってるベンチのすぐ後ろの草むらから、重なりあつた二人の女の子が出てきた。

続いてその後ろから、ショートヘアの女の子と、リボンをウサギの耳のように結んだ女の子が出て来る。

「ちよつと五月、私の上から退きなさいよ」

「私の体重が重いつて、遠回しに言いました？」

「言つてないわよ！」

「あはは、ごめんねー」

「お、おう……」

苦笑いをするシヨートヘアの女の子に謝罪の言葉を言われたとき、風太郎は生返事をするのがやっとだった。

#3 二乃、フラグを立てる。

「はじめまして。何か困ったことがあったら、一花お姉さんに相談してね」

「お姉さんって……同学年だろ」

「ふふっ……私、五つ子の長女なので」

そう言うと、一花は風太郎の耳元に口を近付け、二人以外には聞こえないような小さな声で囁く。短く切られた髪の毛が風太郎の頬をくすぐる。

「三玖のどこが好きなの？ 一目惚れ？」

一花の肩越しに、不思議そうに首を傾げる三玖の姿があった。

「そういうわけじゃ……ハンカチ貸してもらった時に少し話したただけだ」

「少し、ねえ」

意味深に言葉を切り、口角を少し上げ風太郎を見る一花。

今のやり取りに何を見たのかは分からないが、満足したようで一步離れ、

「じゃあ、今はそういうことにしといてあげる」

と言うと、今度は三玖の方に向かって行った。

よく分からん人だ。性格から見ると、あれが三玖の姉だとはあまり信じられないが

.....

まあ顔はそっくりだったな。

とうか待て。五つ子だと？

だとすると、つまり……。

風太郎は昼のらいはとの電話を思い出す。

『アットホームで楽しい職場！ 相場の五倍のお給料が貰えるって！』

成る程、相場の五倍の給料ってそういうことだったのか……。

俺に五つ子全員の家庭教師をやれと。

いやいやできるのか？

頭はいい俺だが（自尊心）、何せ人に教えたことがない。

だが……。

『これでお腹いっぱい食べられるようになるね！』

やるしかない。

五つ子全員の勉強のでき具合にもよるが……まあ、なるようになるだろう。

俺だってお腹いっぱい食べたいしな。

「うーえすーぎさーん」

風太郎がそんなことを考えていると、目の前から自分を呼ぶ声が聞こえることに気づく。

顔をあげると、少し近付けば鼻がふれ合ってしまったし、うさぎの耳のようになり、リボンを結んだ少女がいた。

「うおっ！ 誰!？」

「あはは。やっとこっち見た」

突然目の前に現れた少女から、顔を引く風太郎。

ウサギリボンの少女は、それを見て続ける。

「私は中野四葉です！ よろしくお願ひしますね」

「おう……」

先程から五つ子の名前を三人聞いたわけだが……。

やっぱみんな、顔似てるな。

正直、それぞれが身に付けているアクセサリーがあるからいいものの、外されたら誰が誰かを当てる自信はない。

「うーん？ なんだか反応が薄いですねー」

「ああいや、……四葉って……運が良さそうな名前だなんてな」

適当に誤魔化したつもりだが、意外にも四葉は風太郎の言葉に食い付く。

「確かにそうかもしれないけど……例えば、テストの4択問題とか絶対当たりませんよっ。」

「は？」

そう言い、鞆の中を漁り始める四葉。しばらくすると、プリントがまとめてあるファイルの中から一枚を取り出して、風太郎に差し出した。

「ほら、見てください上杉さん！ 4択問題すら全て間違えて、0点です！」

胸を張って自慢気にいい放つ四葉。

しかしそれは、風太郎にとって絶望の宣告でしかない。

プリントを持つ手は震えていた。

何度見ても0点。綺麗にバツマークが並んでいる。

あまりにも信じられない光景に、自分のテストではないにも関わらず何度も見直し

……。

「あまり見ないで下さいよ……？ 照れちゃいます……。」

0点が何言ってるんだおい。

これから来る自分の未来を想像し、風太郎はがくりと肩を落とす。

しかしすぐさま顔を持ち上げ向き直り、最後の希望を込めて四葉に問う。

「なあ、あとの四人は……成績どうなんだ？」

「私ほどじゃないですけど、全員赤点なのは変わりません！ みんな一緒です！ 何故なら……私たちは五つ子ですからー!!」

「ですからー、ですからー、……と風太郎の頭の中で、四葉の言葉が反響する。

あー……。やっぱ裏の仕事だろ、これ。

「何が五つ子ですからー。だよ!!」

「あつ！ 上杉さんが怒りました！」



「「「家庭教師?!」」」

おお。五つ子息びつたりだな。

驚くのも無理はないだろう。何せ、自分の身内に何故かくつついてた見知らぬ男が家庭教師なんだからな。

「ふーん……パパが言ってたけど、まさかあんただとはねえ。……こんな家に引き込もってプラモデルばっか作ってそんな人で大丈夫なわけ？」

「偏見が過ぎるな……えーっと」

風太郎が三玖に説明をしてほしいと目配せすると、三玖はその意図を察して口を開く。

「次女の二乃だよ。五つ子の料理担当。最近タピオカにはまって、よくインスタ写真上げてる」

「ちよつと！ なに勝手に言いふらしてんのよー！」

説明口調の三玖に抗議の声をあげる二乃。だが構わず三玖は続ける。

「あとは、そつちの星の髪飾りを付けてるのが五月。二乃が料理担当なら、五月は食事担当。インスタでは——」

「ああー！ それ以上はダメです！ あと食事担当って！」

二乃と同じく五月も声をあげるが、チラリと風太郎の方を見ると一つ咳払いをし、向き直る。

「中野五月です。上杉君……ですよね、よろしくお願いします」

「ああ……話しやすく助かる」

「？」

「いや、気にしないでいい」

一花姉（自称）よりよっぽどしっかりしてそうだ。個人的にこういう人は、成績もい

い傾向にある気がするんだが……。やはり四葉の言う通り、全然ダメなのだろうか。

「ちよつと五月！ 私はこんな冴えないもやしが家庭教師なんて認めてないわよ！」
冴えないもやし。

「じゃあどんな人がいいの？」

と、三玖が問うと、二乃は顎に手をあて、少し考える素振りをみせた。

「そうね……。金髪で、少し強引な……。つてちがうでしょ！」

「おお、ナイスノリツツコミ」

「二乃、楽しそう……」

「楽しくない！」

一花と三玖の言葉に反論する二乃。確かに楽しそうだと風太郎も心の中で三玖に同意した。

「ですが……。あのお父さんが見つけた人ですよ？ 心配ないのでは？」

逸れた話を五月が戻す。五月の言うことに一理あると感じてしまった二乃は、咄嗟に言葉を返せなかった。

「う……。あーもう！」

二乃はキツ、と風太郎を睨み付ける。

「三玖と何してたか知らないけど、私はあんたのことなんか認めてないから！ 家庭教

師も必要ないわよ！」

「認めてないって言われてもな……そうか」

他の四人に悪印象を持たれてはいなさそうだが、二乃は別のようだ。

だが、風太郎も言われっぱなしのままではない。

「なら、明日から家庭教師が始まるらしいんだが……最初に全員高校一年の復習テストをしよう。家庭教師いららないんだから、それなりに勉強はできるんだろ？」

風太郎の発言は二乃を煽ったようにも聞こえるが——半分はそうだが——期待もしていた。

もしかしたら、本当は勉強ができるのかも知れないと。

もしそうなら大分楽になるし、一定の成績まで伸びた二乃自身も他の四人の勉強を助けるということができる。

「ふーん……あんまりアタシを侮らない方がいいわよ」

「ああ、期待してるぜ」

不敵な笑みを浮かべ、自身満々な様子の二乃。

それを見た三玖達が微妙な表情をしていたことに、風太郎は気付かなかった。

#4 三玖はお布団の気持ちよさを知る。

「で、風太郎君のどこが好きになっちゃったの？」

「ち、違う。そんなんじゃない……」

三玖は一花のいきなり核心をつく質問にたじろぐが、すぐに落ち着きを取り戻し、持ち前の冷静さでガードを固める。

「ふーん……。じゃあ、何かやましいことでも？」

「うっ……。え、えつと……」

薄すぎるガードだった。冷静さはどこへ行ったのか。

「え、ええっ！？ み、三玖……。もしかして本当にやましいことを……」

「一花の考えてるようなことじゃないから！」

「え、私の考えてることって？ なになに？ お姉さんに教えてよ。……答えないなら……こうしちゃうよー」

そう言い、一花は三玖のパジャマの下に手を潜り込ませお腹の辺りをつまむ。

「ひあっ……。あ、ダメ……。あつ、ふ、ふふっ」

口に手をあて、くすぐったさを我慢する三玖。抵抗をしようと動く三玖により、ベッ

ドのスプリングが軋む。一花の攻撃は三十秒ほど続いた後にようやく終わった。話は少し前に遡る。

転校初日の夜。

三玖は二乃が作った夕食を食べ、勉強は勿論せずにドキュメンタリー番組を見て、いざ寝ようとしたその時。

ガチャリと扉が開き、パジャマ姿の一花が三玖の部屋に来たのだ。

「三玖ー久しぶりにお姉さんと寝ない？」

「汚くしないなら……いいよ」

珍しいことに三玖は少し驚いたが、断る理由は特になかったのでそのまま自室に招き入れた。

ひとしきり部屋の中を物色された後（汚くなった）一緒にベッドに潜り、今に至る。

寝るときにショーツ以外脱ぐ性質がある一花は、自室ではなかりと遠慮なく裸になった。

まさかこんなことになるとは考えもしなかった三玖は、一花を自室に入れたことを早速後悔をし始めていた。

床に散乱した自分と姉の下着を見て（漁られた）、はあ、とため息をつく。

一花は他人の下着に興味を持つお年頃なのだろうか。自分の下着はすぐどっかやるくせに。

「い、いじわる……」

「ごめんって。で、ほんとはなにがあつたの？」

「もう……笑わないでね」

じとつとした目で一花を見るが、しかし誰かに相談したかつたこともあり、昼にあつた出来事を最初から説明した。

ハンカチを貸したこと。お昼を一緒に食べたこと。そして……自分がした告白まで。

説明をしていくうちに、妙な恥ずかしさが込み上げてくる。

なんであんなこと言っちゃったんだろう……。

友達になってくださいって……高校生にもなって……うう……。

全て話終えたとき、一花は。

「ふ、ふふつ……ご、ごめんって。あ、暴力は禁止だよ……ふふつ」

笑っていた。

どすつどすつではなく、ぽこぽこ布団の中で一花の腹を殴る三玖。

「笑わないでって言ったのに」

「笑わないとは言っていないけどね」

「……」

ぼこぼここと殴り続ける。

「それで三玖はどうしたいの？」

「え？」

「風太郎君と仲良くなりたいたいでしょ？　なんで？」

「なんでって」

それは……なんでだろう。

あんなこと、なんで言ったのかもわからないし……。

うーん。

少し考えてみても、三玖の頭には答えが浮かんでこなかった……が。自分の中に芽生える一つの気持ちには気付いていた。

明日からの学校、楽しみだな。

そんなことを思ったのはいつぶりだろう。

「やっぱり、やましいこと？」

「だから違う！」

ぼ(っ)ぼい。

「わからないの。なんであんなこと言ったのか、そう思ったのか——」

自分でも変だと自覚しながらそう言うのと、一花から返ってきたのは意外な言葉だった。

「ふーん……ま、分からなくてもいいんじゃない？」

「え？　なんで？」

「だって、今日あったばっかりでしょ。これから分かればいいじゃん」

……それも、そうかもしれない。

まだ出会ったばかりで、家庭教師すらもまだ始まってない。たまたま食堂で会っただけ。急ぐ必要はないのだ。

「まだ一日も経ってないでしょ。明日は風太郎君がウチに来るんだから、そつから頑張ればいいの」

樂觀的な一花らしい考え方だったが、三玖はどこか納得していた。

「そうだね、ありがと」

「どういたしまして。ま、お姉さんだからね。困ってる妹くらいは安心させられないと」
柔らかな微笑を浮かべながら、左手を三玖の頭にのせる。

久しぶりに感じた気がする一花の姉らしい一面。

……だが三玖は安心を覚えたりしなかった。なぜなら――。

「ふーん……で、さつきからなんで、安心させたい妹の服を脱がそうとしてくるの？
すつごく不安」

「だって私だけ裸なおかしいじゃん」

「私がおかしいみたいと言わないで」

「えーいいじゃん、減るもんじゃないし。そもそも三玖は裸で寝たことないんでしょ？
ぐーつすり眠れて気持ちいいから、オススメだよ。一回だけ！ お願いでしょ」

「減るよ！ 羞恥心がすり減ってた一花には分からないかもしれないけど」

「いいからほら、ばんざいして」

「え、ええっ！？」

結局、三玖は一花のいいようにされ――。

その結果。

お布団がひんやりしてて、ちよつと気持ちよかった……。



翌日の昼休み。

できれば一人で食べたかった風太郎だが、三玖に誘われてさらに一花まで教室に来たので、二人に腕を引っ張られながら仕方なく食堂へ向かう。

教室内がざわついていたの言うまでもない。

今度はどんな噂が立つのやらと考えながら食堂の行列に並んでいると、すぐに自分の番が来た。もちろん、注文はいつもと同じ。

「焼肉定食、焼肉抜きで」

「え？ なにそれ」

その奇妙な単語が初耳だった一花は、きよとんとした表情で風太郎に聞く。

からかうことを面白がっている印象しかない風太郎にとっては、そんな顔もするのかと意外に感じていた。

「焼肉定食の焼肉抜きだよ。たくあんと味噌汁と白飯。一汁一菜で戦国の足軽風の食事だぞ」

「ええ……それは……どうなのかな？」

「戦国の足軽は何合も食べてたはず……それだけじゃお腹すいちやうよ？」

三玖の声を聞きながらトレイを受け取り、待つてくれている二人に合流する。

「つってもなあ。無駄に金使うわけにもいかないし……ま、今後どうなるかは今日からの家庭教師次第ってことだ」

すると三玖は何故か考え込むような顔をして。

「そっか、頑張ってるね」

と、すぐに顔を上げ、笑った。

「いや、主に頑張るのはお前らだからな」

「お、お手柔らかにお願いします……」

「いや、頼むぞ。マジで」

俺の生活がかかっているんだからな。と真面目な顔で言うと、一花はあはは。と笑いながら食堂の奥を指差す。

「あそこらへんにみんな集まっているんだって」

みんなとは当然他の姉妹のことだろう。ここにいない二乃、四葉、五月が既にいるということか。

せめて最後の抵抗として風太郎は一花が指す方向の真反対を指差す。

「じゃあ、俺はあつちで食べるから」

「ダメだよフータロー」

しかしそんな敵前逃亡は逃がさないとばかりに、三玖が風太郎の腕をガッチリと掴

む。あまりの力に振りほどくことはできない。

「お前、意外に力あるんだな」

「風太郎君の筋肉が貧弱なだけだと思うよ？ ご飯も全然食べてないみたいだし」

ため息をつきながら、仕方ない。と腹を括った風太郎は、五つ子が集まるテーブルへと向かって行った。



魚介の風味漂うこつてりしながらもしつこくない豚骨スープ。

口のなかでとろけるチャーシュー。

歯ごたえがあるメンマ。

そして、黄金に輝く細麺。

最高です！

「あんた……少しはこいつ見習いなさいよ。正直アタシが男子なら……引くわ」

「デザートはやっぱりプリンですよね！」

「はあ……」



放課後。

青春を満喫している人はこの後カラオケにでも行くのだろうか。そのまま赤点補講に行つちまえ。

若干一名不満顔で、風太郎は五つ子と共に家庭教師をする中野家に向かっていた……のだが。

「ダブルデラックス肉まん！」

「はあ……」

両手に大きな肉まんを持ち、ご機嫌な様子の五月。

食堂でも聞いた二乃のため息がまた聞こえる。もしかすると意外に苦勞してるのかもしれない。

五月の要望で途中のコンビニに寄り道をしたのだ。昼にあれだけの量を食べたにも関わらず、五月の胃袋は満たされてはいないらしい。

三玖によると、いつものことだと言うが、医者の父親は気にしないのだろうか。

風太郎は太るぞ。と言いかけたが、その言葉は二乃が代弁してくれた。

しかし、そのあと膝に蹴りを入れられていたので、もし自分が言っていたら……と考
え、風太郎は一人でゾツとする。

そしてまたしばらく歩くと、前方に大きなタワーマンションが見えてきた。それを
指差して三玖が呟く。

「あれが私たちの家。最上階一フロア全部」

「は? ……マジで?」

「うん。8LDK」

「8LDK!」

「言つとくけど、変なことしたらすぐに追い出すから」

そんな二乃の辛辣な言葉が聞こえたが、正直どうでもよかった。

俺の家 1DKだぞ! なんだ8LDKって!

どうやら俺はお金持ちを舐めていたらしい。

#5 三玖のパソコンには秘密のファイルがある。

シンとしたりピンググの中。

風太郎の前にU字型にテーブルを囲んだ五つ子の様子は様々だった。

眠そうに突っ伏す一花。

ツムツムをする二乃。

真剣な表情でテストの裏を睨む三玖と四葉。

そしてお馴染み、肉まんを食べる五月。

いや、ヤバイな。

まだ解いてもらってすらいらないのに何故か三名ほどヤバイのがいることが分かる。

家庭教師歴二分の俺でも分かる。一体何故なんだ。

現実逃避しかける頭で「いやなに、まだこれからだ。多分」と、さらに現実逃避を重ねる風太郎。

あれだ。テスト前に余裕ぶっこいて高得点とれるような奴。テスト後に「お前勉強してないくせに何でだよ！」みたいな猿声がよく聞こえるだろ？ それだよ。

つまりこの姉妹は、いきなり高得点を出して俺をびつくりさせようとしているわけ

だ。

昨日の公園でのやり取りも今日のテストへの布石。

『私ほどじゃないですけど、全員赤点なのは変わりません！ みんな一緒です！ 何故なら……私たちは五つ子ですからー!!』

そうだ、きつとそうに違いない。

頭に反響する四葉の声は嘘に違いない。

「じゃあ、始めてくれ」

にやりと口を歪ませると、風太郎は一つ咳払いをし、テストを始めるよう告げた。

それを聞いた五つ子たちは……途端に目の色を変えた。

その変化に思わず風太郎は目を見開く。五月も肉まんを口に詰め込む。

彼女たちのテストを解く表情は様々だった。

あれだけの啖呵を切っていた二乃も、さすがと言うべきか、ときに笑顔を浮かべながら空欄を埋めていく。

五月に至っては眼鏡をかけていた。果たしてそれは『眼鏡をかけると頭が良くなるからです!』なのか単純に目が悪いのか。風太郎が解を得る術はない。

だが、それでも分かることはある。

五つ子全員が一度も手をとめずに、一切の空欄も無くペンを走らせているのだ。

——これはまさか……俺の期待以上に……っ！

カリカリとペンが机を打ち鳴らす音がリビングを満たす中、風太郎はどこか安堵に似たような表情でテストを解き終わるその時を待った。

これならいけるかもしれない、と。



百点だ。

まさかここまでとはな。正直見くびってたぜ。

丸つけをした五つ子の答案を見て、素直にそう思った。

『ふーん……あんまりアタシを侮らない方がいいわよ』

ああ見くびってたし侮ってもいた。

だが違った。結果は俺が予想していた遥か先を行っていた。

……そうだな、一つ言うとなれば。

初めて見るオートロックに興奮していた三十分前の俺を殴りたい。

お前ら、もはや名前を呼ぶことすらおこがましいわ。

「何か、申し開きは？」

五つ子全員が風太郎と目を合わせまいとそっぽを向く中、一つの悪目立ちしたりボンがおずおずと口を開いた。

「わ、私は昨日ちゃんと言いましたよ！ 全員赤点だつて」

「待って。それはいただけない」

しかしヘッドフォンがすぐさま口を挟む。

じっと目を細めながらリボンを見詰め……途端に満足げな表情に変わった。

「私は三十二点。この中で……私だけ赤点じゃない！」

「一学年前のテストで、よくもまあそんなこと言えるなおい」

「うーん、でも、私たちはこんなもんだよ？」

「勉強はしておいたのですが……」

「……」

はあ……断崖絶壁から突き落とされた気分だ。

ヘッドフォンが昨日言っていた「ため息ばかり」つてのも案外的を射ているな。

まあ、言った本人が原因作ったんだけどね。

一花 12点

二乃 20点

三玖 32点

四葉 8点

五月 28点

はは、と風太郎は思わず自嘲気味に笑う。

……おっと、あまりの絶望感に肝心なことを忘れるところだったぜ。

「『ふーん……あんまりアタシを侮らない方がいいわよ』だっけか？」

ビクツ　と自分のテストを見る二乃の肩が震えた。

「あの自信満々な顔、恥ずかしいなあ。意地張らないで素直にみんなで勉強しようぜ？
な？」

「うっさいわね！　アタシはこんなんじや認めないんだから！」

勢いよく顔を上げた二乃。若干目が潤んでるように見えるのはきのせいか。

そのまま勢いよく立ち上がり、上にある五つの部屋の一つに入ってしまった。部屋の
数から察するに、あれが五つ子の部屋なのだろう。

バタン、と勢いよくドアが閉じられる。

「あー。フータローが二乃をいじめた」

「ダメだよ風太郎君、女の子には優しくしなきゃ」

「上杉さんならできますよ！」

「肉まん食べると、落ち着きますよ？」

「お前から覚悟しておけよ……」

二乃が部屋に籠ってしまったのを見届けると、まるで自分はないにも関係がないとでも
いうように風太郎に文句を言う三玖たち。まさか自分のとった点数を忘れているのか
？

二乃がいなくなってしまうのは痛い、まあ後で誰かに連れて来てもらえばいいだろう。いつか二乃の機嫌もとらなければならぬが、それも後でいい。案外すぐに出て来るかもしれないしな。

時計を見ると、時刻は四時三十分。帰るまでまだたつぷりと時間が残されている。

「自分たちは関係ないでも思ってたか？」

風太郎が放つ謎の圧に、今度は四人が肩を震わせた。

「この点数……もちろん今から勉強だぞ」

こうなったら無理にでも机に座らして、まずは勉強する癖をつけなければならない。

そう思う風太郎だった……が。

オール馬鹿のこの五つ子に、風太郎の常識など通用しない。



「限界……お姉さん少し寝るね……」

「あつ、おい！」

ふらふらと自室に向かう一花に、風太郎の声は届かない。

勉強開始十五分後、一花脱落。



「もうダメ……です。お腹がすいて力が出ません……」

五月のその呟きを聞いて、先程からどこか虚空を見詰めていた四葉の目に輝きが戻る。

「あー！ はい！ じゃあ私が肉まん買って来ますね！ ダツシユで！」

そう言うが否や、四葉は部屋から出て行ってしまった。

あいつ、抜け出しやがったな。

ソファ一横に置いてある、財布が入っているであろう四葉のエナメルのカバンには触れもせずに出ていった。つまり。

もう奴は戻ってこないだろう。もちろん肉まんも届かない。

「おい五月、起きろ。まだ始まったばかりじゃねえか」

「ダメです……いつもなら二乃がお菓子を作ってくれるのですが……す、すいません

……」

勉強開始三十分後、四葉、五月脱落。



「フータロ……少しお願いがあるんだけど……」

「おおなんだ。何でも言ってくれ！ 勉強のためなら何でもサポートするぞ！」

開始三十分にして、五つ子は三玖以外脱落の壊滅状態。

何がなんでも家庭教師の初回を一時間もせずつに終わらせたくない風太郎は、先程から普段より数倍暗い目をしている三玖に、どんなフォローでもしてやろうと意気込む。

……が。

その『お願い』は風太郎の期待しているようなものではなかった。

「もし私が死んだら……私のパソコンの中身は……見ないで壊して……ね？」

「死ぬのか!?! そんなに苦痛なのか!?! まだ一時間もたつてねえだろ！」

「お願い……だよ？」

三玖はそれだけ言い残し、

「……………すー、……………すー」

机に突っ伏し……………死んだように眠った。

いやいやいや。

三玖のパソコンに何があるのかとか気になることはたくさんあるけども！ いまは

そんなことどうだっていい。

確かに俺も勉強を始めたガキの頃は、字の羅列を見ただけですぐに眠くなったものだが……………ここまでひどいか!?

勉強嫌いにも程があるだろ！

勉強開始四十五分後、三玖脱落。

そしてリビングには、目が死んでいる風太郎だけが残された。

#6 二乃だけが生き残った。

普通の健全な男子高校生なら羨ましがらる状況なのだろう。

美少女五人に対しての家庭教師。もし風太郎に友達がいてこのことを相談したのなら、十中八九嫉妬の目を向けられ、「贅沢野郎、死ぬ」と言われるに違いない。

だが現実には美味しいことばかりではないのだ。

約一時間前に、二乃を除く五つ子たちと勉強を開始した風太郎は周りの惨状を見て絶望する。

現実には美味しくないし、そう上手くもいかない。

一花は眠り。

二乃は引きこもり。

三玖は死んだ（ように眠って）。

四葉は脱獄。

五月はカロリー不足で動けず。

想像を絶する勉強嫌いだと言うことがわかった。

リビングに残っている三玖と五月は揺すっても起きないので、仕方なく先程のテスト

を見直す。

高校二年の二学期でこの惨状。彼女たちは気付いてはいないだろうが、一刻の猶予も残されていないと言つてもいい。

持参したノートに誰がどの問題を正解したか、または間違つたかを記入する。

正直意味は無いかもしれないが、近い未来に上から下まで丸で埋まつてくれることを祈り、小さなことから始めていくことにした。

それから十分程経つただろうか。

五人分の記入が終わり、腕をグツと伸ばしていたその時、上にある部屋のうちの一つが、ゆっくりと開いた。

ガチャリという音は広いリビングにはよく響き、風太郎は顔をそちらに向ける。

ドアの隙間から警戒したように除いている特徴的な髪飾りは……二乃だ。

「あら、家庭教師やつてる割には寂しいリビングねえ」

二乃は机に突つ伏す三玖と五月を見ると、満足そうな顔で手すりに体重を乗せた。

「あんだだけ家庭教師やるつて気合い入れて、この様……馬鹿なの？」

「二十点に馬鹿と言われるとは心外だな」

「なつ……！　今はテスト関係ないでしょ！」

「ああ関係ないな。……だがこうしてる間にもやれることはあるんだ」

風太郎は視線を二乃からノートとテストに戻し、再びシャーペンを持つ。

「だから、やる気ない奴は部屋でツムツムでもやってろ。一人で。この後四葉が帰ってきたらまた勉強は再開するからな……四人でな！」

馬鹿め！ 馬鹿はお前だ馬鹿め！

そう……馬鹿過ぎて三回も言ってしまうほどの馬鹿だ。

他人とコミユニケーションを取らないとはいえ、国語平均偏差値七十四の俺に口論で勝てると思っただか？

そして華麗な（自称）誘導テクニク！

今の冷静な俺の言葉を聞いた二乃はこう思うだろう。

あれ、全然焦ってない——と！

戻ってくるわけのない四葉を、あたかも買い出しに行かせてる風を装うこと。

全然焦っておらず、あくまで冷静な俺。

二つの状況を理解した二乃は、この壊滅的状况を『ただ一休みしているだけ』と受けとるに違いない。

そして一人で部屋にいるのが寂しいのは、ドアの隙間からそつと様子を除いていた時点で察せている。

フハハ！ 抜かったな、二乃！

……しかし。

「……ふーん」

風太郎の予想に反して、いたって二乃は冷静だった。

点数を指摘され動揺していたにも関わらず、一転、冷静な口調で相槌を返す。

そのままリビングまで降りて来て、風太郎の目の前に座った。

「な、なんだ……勉強する気になったか？」

予想外の行動に驚く風太郎。しかしやる気になったのならそれでいいと二乃に問う。

それに対する二乃の返答は、意外なものだった。

「……嘘ついているのがまるわかり、よ」

俯いて隣の五月の髪を撫でながら、二乃はぼつり、とこぼす。

「は？　嘘なんて……」

「わかるのよ」

誤魔化そうとした風太郎の言葉を遮ったその声は、弱く、しかし有無を言わせない

はつきりとしたものだった。

風太郎は思わず口をつぐむ。

俯いた二乃の表情は、前髪に隠れて見えない。

「十六年も一緒に暮らしてきたのよ。……あんたには、わからないわ」

それは、今までの二乃とはまるで違う雰囲気で。

二乃の言葉の後に続いたリビングの静寂が、何故か重く感じた。

十六年。

産まれてからずっと一緒にいるからこそ、わかることがあるのだろうか。

風太郎が何も返さないのを見ると、はあ。とため息をついて、

「ほら五月、起きなさい。クッキー焼いてあげるから」

「……ふえ、え!? ホントですか!?!」

先程の雰囲気とはまた一転、普段の様子で五月に声をかけた。

「お腹すいてるんですよ。勉強なんてしないで私のクッキーでも食べなさい」

五月は申し訳なさそうな表情を風太に向ける。

「……すみません上杉さん。背に腹は変えられません……」

「……ああ、ああ。文字通りだな」

二乃の再び変化した雰囲気に対し驚かされたが、『クッキー』という単語に反応して飛

び起きた五月に、苦笑しながら返事をする。

何か、あるのだろうか。

出会ってまだ二日目。こいつら五つ子に対してまだ分からないことが大半を占めているが、今の二乃の様子は少しおかしかった。

普段他人と関わらない俺がわかる程度には。

だが情報がほとんどないと言つてもいい今、考えても無駄だと判断し、頭の片隅に追いやった。

今ある五つ子の情報といえば、極度の勉強嫌いだということ、五月が大食いだということ、五月が肉まんが好きだということ。それと新しく、五月が二乃に餌付けされるといふことぐらいだ。

なんか五月ばかりの無駄な情報でしかない。

「あ、言つとくけど、あんたに食べさせるクッキーはないから」

「お前俺のこと嫌いだろ……」

「はあ？ そんなの言うまでもないでしょ」

「……そうかよ」

二乃に勉強をさせるまでの道のりは、やはり長そうだ。



勉強しなきゃいけないことくらい、アタシだってわかってる。

しないより、したほうがいい。

少なくとも落第して離ればなれになることはなくなる。

けれどあの家庭教師はいらない。

勉強は自分たちだけでも、落第しない範囲なら助けあつてできるはずだ。きっと、今度こそ。

オーブンレンジで焼かれているクッキーの様子を見ながら、二乃は風太郎の顔を思い浮かべた。

三玖と気軽に話してくれているのは、正直嬉しいし、姉として喜ぶべきなのだろう。でも、心のどこかで。

何故か三玖に関わって欲しくないと思う自分がある。三玖がどこか楽しげにアイツと話しているのを、否定したくなる自分がある。

上つ面で特に理由もなく否定して、妹の成長すらも喜べない。

そんな性格の悪い自分が、アタシは嫌いだ。

自嘲を込めて、フツと小さく鼻で笑う。

だが、あの家庭教師はいらない。

五人の家に入って欲しくない。

……そんなの風に思ってる自分は、果たして。

他の四人から見たら、その思いは、エゴの塊でしかないのだろうか。

「いいにおいがしてきましたね！ 上杉さん！」

「お前食べ物のことになるとほんと元気になるな……」

キッチンの向こうから五月の元気な声と、風太郎のため息混じりの声が聞こえた。

一応用意した風太郎分の飲み物に、嫌がらせて睡眠薬でも入れてやろうかと思つたが

……。

「二乃の作るクッキーは、本当に美味しいんです！」

虚しくなるだけな気がしたので、やめた。

#7 風太郎はオーストラリアドルを知っている。

んっ……。

捉えようによつては艶かしくも聞こえる音を漏らしながら、三玖は上半身を起こした。あまりの目映さに手の甲で目を擦る。

トントントン、と小気味の良い音がどこからか聞こえてくる。

……。

自分が寝ていたソファアを、ボーッとしながら見ていると、ふと頭に疑問が浮んだ。私、なんでこんなところで寝てたんだっけ……。

両手をソファアにつき、体を捻つて音の聞こえるキッチンの方を見ると、そこにはエプロンを着けた二乃が立っていた。二乃はリビングに背を向けているので、三玖には背中しか見えていないのだが、何をしているのかは音とリビングに漂ってくる匂いでわかる。

体の捻りを元に戻し、自分のスマホを探そうとテーブルの上を見ると、そこには散乱している筆記用具とプリントがあった。

あれ？　なんで……普段勉強なんてしないのに……っ！

徐々に働き始めた頭を傾げ、そしてついに思い出した。はつとして辺りを見る。

リビングには私だけ。キッチンに二乃はいるけど……フータローがいない！

……私、寝ちやつたんだ……。

頭の中を『なんで』がぐるぐると回り続ける。

時計を見ると、針は七時五十分を指していた。

なにか『パソコンの机身は見ないで壊してね』だ。寝る前の私を殴りたい。

「あら三玖、起きてたのね」

頭を抱えようかと思っていると、前方から声がした。顔を上げると、エプロンをつけたままの二乃がソファアに座りながら、テレビのリモコンを手にしている。どうやら料理は一段落したらしい。

「もう少しで晩御飯ができるから——」

「フータローは!?!」

二乃の言葉を遮り、ソファアから身を乗り出すようにして聞く。

「……あいつなら一時間前くらいに帰ったわよ」

二乃は、すぐに風太郎のことを聞く三玖に若干の不満を覚える。

二乃自身、それが検討違いな感情だとは理解しているものの、風太郎を否定している自分を否定することはできなかつた。

「そ、そつか……明日謝らなきや……」

「別にいいでしょ……あんなヤツ」

「でも……」

思わず突き放すように言ってしまった二乃は、しかし、ガツクリと肩を落としてる三玖を見て何を思ったのか言葉を足す。

「別に怒ってなかったわよ」

「え？　 そうなの？」

「ええ……あんたはネガティブ過ぎんのよ。そんなこといちいち気にしてたらキリがないわ」

明日も来るらしいし……来んなって言ってやったのに、と。

「そつか……」

その言葉を聞いた三玖は、深く息を吐き出し、体を脱力させてソファーにあすけた。

二乃が何かのバラエティー番組を見ている横で、そのまましばらく天井を眺めていると、ガチャリとドアの開く音がした。

そちらに視線をやると、開いたのは右から二番目の部屋。

「あ、三玖起きてたんですね！　肉まん食べますか？」

四葉は部屋から出て三玖を見つけると、右手に持った紙袋を高々と掲げた。

なんでまた肉まん？ 今日何個目？

疑問に思っていると、それを二乃が察したのか説明してくれる。

「勉強してる途中で四葉外に出たんでしょ？ その時に五月だけじゃなくて、みんなの分も買ってきたのよ」

そういうわれてみると、確かに四葉は途中でいなくなっていた……気がする。よく覚えていないが、（もちろん勉強の内容も）どうやら逃げ出した訳ではなかったらしい。

「大変だったんですよ。みんなが寝ちやったあと、五月と二人で勉強だったので、すごく厳して……」

成る程。五月は勉強に必要なカロリー（？）を肉まんを食べ続けることによって補給したと。

これから勉強していくなら五月の体重は大変なことになるわね。と二乃が思う一方で、それを聞いた三玖は再び焦っていた。

二人はしつかり勉強していた。

私は他の四人のようになにかを持っているわけではない。

なにも持っていない自分が勉強の一つすらできないなんて、ましてや寝てしまうなんて……四葉と五月は起きていたのに。

フータローが怒っているかとは関係ない、私自身の問題。

二乃の言う通り、明日からしつかりしなきや。



「はあ、はあ……ギリギリセーフ、か」

走っていることかいた汗で、じつとりとワイシャツが肌に張り付く。

起きる時間が二十分も遅れてしまった。

家庭教師と自分の勉強の両立がこんなに厳しいとは、少し悔っていたかもしれない。

落第寸前の五つ子にどのように教えるのが良いのか。

風太郎は給料が高いなら必要経費だと、なけなしの金をはたいて家庭教師の入門書の
ようなものを買って一通り読んでみはしたが……いまいちピンと来なかった。

家庭教師として致命的な気はするが……なんで分からないのかが分からないことが
一番の課題だろう。

校門が見えたので携帯の時計を確認すると、時刻は八時二十分。朝のホームルームま
で余裕があるので、風太郎は走るのをやめた。

と、その時。真横を車が通り抜け、汗で湿った体をひんやりとした風が撫でる。

その車は徐々に減速していき、校門の前で止まった。

「おおつ、みたこともない外国の車だ」

黒塗りで縦に長く、貧乏人である風太郎でさえ一目見ただけで高級な車だと分かった。おそらくリムジンというやつだろう。

「かつけえ……百万（オーストラリアドル）くらいしそうだな」

明らかにこの学校とは不釣り合いな車に目を奪われていると、静かにドアが開いた。

「あ、フータロー……」

「なんだ、お前らか」

出てきた人物——三玖を見て、なるほどと納得する。あんな豪華なマンションに住んでいるんだ。リムジンを所有しているもおかしくないかもしれない。

三玖に続いて続々と五つ子達が出てくる。

「あ、上杉さんです！」

「ふああ……おはよ、風太郎君」

「なんであんたがいんのよ」

「おふあひようほさいます」

「五月は口になんか入れたまま喋るな」

無言！

一番最初の問題すらやってないのか……。まあ、なんとなく予想はしてはいたが……。

「ふ、フータロー……」

「ん？　なんだ？」

少し落胆していると、三玖が側に来た。

「そ、その……えつと……」

「ん？　どうした？」

「やっぱりなんでもない！」

「そういうと校舎の方に向かって行ってしまった。追いかけてっこと勘違いしたのか知らないが、なぜか四葉も三玖を追っていく。

なんだったんだ……？

「俺、なんかやらかしたっけ？」

「それが女の子なんだよ。風太郎君」

「はあ？」

後ろでリムジンが発車した音がする。

風太郎は三玖が何を言いたかったのかは分からなかったが、後で教室で聞けばいいと

思い、教室に向かった。



風太郎より早く教室についた三玖は、一枚の手紙を風太郎の机の中に忍ばせた。